

上智大学カトリック学生の会

創立65周年記念誌

上智大学カトリック学生の会



カト学創立 65 周年記念ミサ 集合写真

(2024 年 11 月 17 日 (日)、カトリック麹町 聖イグナチオ教会マリア聖堂)

目次

〈巻頭言〉 上智大学の心を生きるカト学

クラレチアン宣教会司祭 増田 健 2025年度カトリック学生の会指導司祭…………… 4

〈記念ミサ説教〉

イエズス会司祭 菅原 裕二 1976年度法学部法律学科入学…………… 6

〈記念式典祝辞〉

カトリック学生の会創立65周年を祝して

イエズス会司祭 高祖 敏明 1965年度外国語学部ドイツ語学科入学…………… 8

イエズス会司祭 山内 保憲 1993年度神学部神学科入学…………… 12

〈カト学の過去・現在・未来〉

カト学創設のお話し（2023ASFでの談話）

山村古志郎 1956年度経済学部経済学科入学…………… 14

あるカトリック神父との出会い 大宅 一裕 1969年度外国語学部ドイツ語学科入学…………… 15

カト学65周年記念誌に寄せて 杉浦 正和 1969年度経済学部経済学科入学…………… 17

杉浦真理子 1972年度文学部国文学科入学……………

カトリック学生の会65周年によせて 望月伸一郎 1978年度法学部法律学科入学…………… 19

カトリック学生の会65周年記念によせて 純心聖母会 久松久美子 1979年度理工学部化学科入学…………… 20

今、ここで
菊地 智久 1979年度経済学部経済学科入学……………22

私の中の蒼いフォトグラフ
加藤 美紀 1984年度外国語学部ポルトガル語学科入学……………24

あのを若き日々に与えられた関わりから
シャルトル聖パウロ修道女会
松本 巖 1984年度神学部神学科入学……………26

カト学での関わりと繋がり
フランシスコ会司祭
藤原 和隆 1985年度法学部国際関係法学科入学……………27

私にとつてのカト学
里見 康介 1986年度文学部史学科入学……………29

土臭いキリスト
塩田 周三 1987年度法学部国際関係法学科入学……………30

カト学は瞳の中に イエズス会司祭
越智 直樹 1999年度神学部神学科入学……………32

私を支えてくれたカト学
池田辰之助 2014年度神学部神学科入学……………34

青春の場所
渡邊 知世 2018年度神学部神学科入学……………36

カト学の不思議な招き
佐野 昂輝 2020年度文学部史学科入学……………37

「カト学」で得た恵み
橘 優有 2023年度神学部神学科入学……………39

生きた神学を体験できるコミュニティ
郡山 隼 2024年度神学部神学科入学……………40

求める者の軌跡
篠田 佑人 2025年度文学部哲学科入学……………41

〈エピソード〉

カトリック学生の会65周年に寄せて
吉武 豊 1976年度法学部法律学科入学……………43

上智大学の心を生きるカト学

クラレチアン宣教会司祭 増田 健 (2025年度カトリック学生の会指導司祭)

皆さま、こんにちは。一昨年の秋から上智大学カトリック学生の会の指導司祭を務めております、増田健です。カト学65周年おめでとうございます！

卒業生の皆さまには、日頃よりカト学を温かく見守り、支えていただいていることに心より感謝申し上げます。皆さまが心をこめて築き上げてこられたカト学は、時代を超えていまでも上智大学の中で息づいています。もしかすると、卒業生の皆さまが活躍なさっていたころとは少し変化したところもあるかもしれません。しかし、先輩方から受け継いだカト学の本質は今もお脈々と受け継がれております。その本質とはすなわち、「上智大学の心」として鼓動し続けていくことだと思います。

現代では地球温暖化に反比例するかのようになり、社会における人間関係はどんどん冷たくなっていると感じることもあります。そのような中で、私たちの愛するアルマ・マターである上智大学が心の温もりを失わないためにも、カト学は小さな存在でありながらも、大切な使命を担っていると信じています。

この使命を思い描くとき私の頭に浮かぶのは、神戸市立博物館に所蔵されている、あの有名なフランシスコ・ザビエルの肖像画です。そこに描かれたザビエルの胸には、キリストの愛に満たされた「燃える心」があります。私はまさにこの「愛に満たされた心」が、上智大学においてカト学の目指している姿なのではないかと思えます。そして、カト学というこの素晴らしいファミリーと共に歩めることは、私にとってもつたいないほどに大きな恵みです。

カト学にとつて最も大きな宝は、所属してくれている学生たちです。学生たちと接するたびに、彼らを愛おしく思うと同時に、何よりも学生たち自身が「神さまの大切な宝物」であることを強く感じています。いまのメンバーには、洗礼を受けている人も、そうでない人もいます。しかし、彼らはみんなイエスの教えに心惹かれ、様々なことにチャレンジしています。このような想いをつないでくれた学生たちのおかげで、そして前指導司祭のフィルマンシャー神父さまと共に歩んでくださったおかげで、コロナ禍の中でもカト学は存続していくことができました。

コロナ禍が少し落ち着いていた昨年からは、学生たち自身の発案で「週に一度は必ず集まって、何か活動しよう」とい

う試みが始まりました。この活動は、ギリシア語で「恵み」を意味する「カリス」と名付けられ、ここでは学生たちが様々なことを企画しています。たとえばミサ奉仕のための典礼勉強会、聖書の分かち合い（レクチオ・デイヴィナ）、そしてバザーに向けて手作りロザリオを編むこともあります。また月に一度は小教区や修道院を訪問しており、これを楽しみにしている学生も多いようです。そして時には映画鑑賞をしたり、聖書かるたで盛り上がることもあります。そして「おたミサ」（お誕生日ミサ）では、会員の人生を神さまに感謝し、みんなで祝福を願い、ともに祝うという、先輩方から代々受け継がれてきたカト学の伝統も大切にしております。これらの活動に参加させていただく度に、学生たちが「恵み」を感じて欲しいと願う一方で、私にとつて彼らとの出会いこそが神さまが賜ってくださった「恵み」であると実感しております。

その他にも、様々な機会で大学行事に携わることができるともカト学の大きな魅力です。カトリック・イエズス会センターの皆さまの温かい導きのもと、学生たちは大学行事ミサのお手伝いも頑張ってくれています。ここでは、単に与えられた役割を果たすだけでなく、「上智大学の心を祈りで鼓動させる」という大きな体験の場となっているように思います。そしてザビエル・ウィークでは、上智大学の原点である「ザビエルの夢」を心に受けとめながら、カト学の学生たちがアイデアを出し合い、準備を進めています。そしてもちろん、この心を私たちが生きることができるのは、イエズス会の方々が共に歩んでくださるおかげです。梶山神父さま、マイク・ミルワードさま、キエサ神父さま、菅原神父さま、酒井神父さま、山内神父さま、小山神父さま、そしていつも温かな励ましをくださるフィルマシヤール神父さま……。この他にもたくさんの方々の神父さま方のお世話になっております。本当に多くのイエズス会の神父さま方に支えられているカト学は本当に幸せだと思います。

またソフィア祭でのチャリティー・バザーでは、物品の販売にとどまらず、可能な限り寄付先と直接関わることを心がけています。苦しんでいる誰かの役に立ちたいという想いを抱いて頑張っている学生たちの姿には、胸を打たれます。そして献品などを通してこの活動を支えてくださる、S Jハウスの皆さまや卒業生の皆さまに、改めて深く感謝申し上げます。学生たちも、皆さんによって自分たちが温かく支えられていると感じているようです。

このように長きに渡って築きあげられてきた「カト学」という素晴らしい仲間たちに出会わせていただいたことを、神さまに感謝したいと思います。これからも、上智の心を鼓動させていく喜びを、卒業生・在校生ともに生きていきましょう。皆さま、創立65周年本当におめでとうございます。そして心からありがとうございます！

司祭に叙階されて間もない頃のことです。私はまだローマで修士課程の勉強中で、クリスマス休暇と復活祭休暇には北イタリアにあるバツサーノという町の教会に手伝いに出掛けていたのですが、その頃、年配の主任司祭がしてくれた話です。その神父様が若かった頃、ブドウ畑が広がる村の教会に派遣されていたある秋の日、突然季節外れの大きな雹がたいへんな勢いで降り出し、窓や屋根に当たって怖いほどの音がしたそうです。やっと降りやんだのを待つて司祭館を出、急いで信者さんの家を回りました。ちょうどブドウの収穫を行う時期で、神父様はブドウ畑に被害が出たのではないか、もしそうだとしたらどう慰めの言葉を掛けようかと頭を悩ませながら出掛けました。

農場の真ん中にある家に近づくとき、信者さんが出てきて「神父さん、今年は神様が刈り取る番だったんだよ。こういう年もある」。そう言っていてケガをした人がいないかと神父様と一緒に出掛けたそうです。若かったその助任司祭は「神様が刈り取る番」という言葉に信仰の深さを感じ、いつも自分が説教台から偉そうに神の摂理について語っていたことを恥ずかしく思ったと話してくれました。

私はその時に五年以上ローマでの勉強をしていたのですが、何かをやっと理解できた気がしました。留学の初めから感じていた何とも言えない壁・ギャップは、名付ければ「伝統の違い」だったのではないかと。勉強しても勉強しても（点数は取れるのですが）何かヨーロッパから来た同級生たちに追いついたような気がしない。何か敵わないと感じていたのは「受け継がれてきている伝統の差」なのではないかと気づいたのでした。

私も信者になって五代目です。古い方ですが、長崎の信者たちにはもっと長い伝統があります。しかし、日本の教会自体が信徒再発見からまだ一五〇年で、イタリアの教会は二〇〇〇年の伝統を誇っています。そこには醸成された信仰の伝統と呼べるものがあるのではないかと。どちらがより優れている、偉いということではなく、受け継がれた歴史の差がある。私はそうした側面で競争するのをやめることにしました。私の力ではどうにもならない事であるし、教会には神様が直接に下さる恵み（今日祝っているミサはまさにそれです）と同時に、受け継がれていく中ではごく

まれる恵みというのがあるのではないかと知ったのです。

私たちは今日カト学の65周年を祝っています。その間に多くの先輩方の、仲間たちの、また指導し、同伴し、カト学の友であってくださった多くの方々、特に神父様方がおられたことに感謝しています。その方々がいなかったら、今、私たちの多くはここにいなかったかもしれない。今日の第一朗読で聖パウロは「受けたもの」「受け継いで伝えたもの」を語っています。そこに本質的なものがある、と。私たちも受け取ったものを確認し、受け継いでいかなければなりません。信仰はそうやって深まっていくのです。しかし、受け継いでいかなければならないのは型や形式ではありません。昔はよかったという話をしていればカト学も教会も発展しません。

カト学に皆が来たのはカト学が楽しかったからです。面白かったからでしょう。役に立つものを求めてきたのではなく、もしかしたら信仰を求めてやってきたのでもなかったかもしれない。しかし私たちをつないでくれていたのは信仰でした。見えないけれどもなくならないもの（なくならないことは今日ここで集まっていることが示しています）。それを教えてくれた人たちがいたお蔭でした。それが受けた恵みだったと気がついた人には受け継いでいく責任があると思います。カト学は続いていかなければなりません。

現代、信仰を持つことや保つことは簡単なことではありません。イエスの教えを生活の中で実践していくことは学生だった頃より難しくなっています。自分が意識さえ変えれば不可能ではないと考えるのは現実的な信仰ではありません。しかし、短くてもよいからする毎日の祈り、勇気を出して行う愛のわざ、面倒くさいものである教会での活動、誰かがしてくれるだろうと逃げたくなる社会での奉仕。具体的に人を愛して実りが残るときに、これは自分一人で行っているわざではないと気がつくことがあります。それは受けたもの、受け継がれてきたものの表現です。

愛すべき相手は遠くまで行かなくてもそばにいます。受け継いでいく中でこそ深まるものを見極め、頂いた恵みをそれぞれの暮らしの場に運んでいけるように知恵と力を祈り求めましょう。カト学の祝いをこのような形で祝うことが出来るようにしてくれた一人一人に感謝します。ここに集まることがかなわなかった仲間たちのためにも祈りましょう。

カトリック学生の会創立65周年を祝して

イエズス会司祭 高祖 敏明

1965年度外国語学部ドイツ語学科入学生

カトリック学生の会創立65周年、おめでとうございます。

ただいまご紹介に与りました高祖敏明と申します。イエズス会司祭で、1977年3月に司祭叙階の恵みを受けました。現在は、上智大学のお隣のカトリック麹町聖イグナチオ教会の主任司祭を務めております。

皆様もご存知かと思いますが、イエズス会という修道会は結構人づかいのあらい面がありまして、上智大学での奉仕の務めが終わって七一歳で退職したところ、聖心女子大学に派遣され、そこでの学長の務めが四年の任期満了で終了して、少しゆつくりできるかと期待していたら、今度は聖イグナチオ教会で働きなさいとのことでした。しかも、助任司祭も経験しないで、いきなり主任司祭になるということで、東京教区の小教区の主任司祭の方々も、「助任も経験せずに主任なの!？」と、皆驚いていました。ただ聖イグナチオ教会には優秀な助任司祭が四人もおられますし、協力司祭も数人おります。その方々の働きに助けられて何とか務めております。今日のこの集いの中にも、教会の各種聖歌隊の一員とか、聖イグナチオ教会でさまざまな奉仕をしてくださっている方がおられると思います。この場を借りて御礼申し上げます。いつもお世話になり、ありがとうございます。

さてカト学が65周年を迎えたということは、1959年に誕生したということです。私が上智大学に入学したのが1965年4月。その当時は、六学部（神学部、文学部、法学部、経済学部、外国語学部、理工学部）制で、全学生数は五八〇〇余人。そのうちカトリック信徒は五〇〇人を超えていました。全学生の約一割がカトリック信徒という割合です。一年次の必修科目に宗教学と哲学とがあり、宗教学はカトリック学生が全員、学部学科の枠を超えて同じ一つの教室に集められ、指導司祭的な立場と役割を持つ神父様の授業を受ける決まりがありました。私が一年次のときの担当者はエヴァレット（小山信夫）神父様でした。私は外国語学部ドイツ語学科にいたのですが、宗教学の時間には、カトリック学生はみんな指定されたエヴァレット神父様の授業に出席しているので、自分のクラスにはいない。同じクラスに、ミタさんという東京出身のカトリック信徒がいました。ドイツ語学科で宗教学を教えていた先生はエヴァレット神父様だったのですが、毎回出欠をとられる。ところが、高祖もいないし、ミタもいない。ですから、ミタさんの名を何度呼んでも返事はありません。そこで、「ミタ？見たことがない」と冗談を言ったとか。こうした話が伝えられています。

私が入学した時点のカト学の会長は、たしか加藤容止さんで、数年後に創刊された「上智新聞」の初代編集長を務められた方です。その年の冬に会則に基づいて会長選挙が実施され、新会長に選ばれたのは広島出身の岸本勝義さんでしたか、少々うる覚えです。私は二年次からカト学に顔を出すようになったのですが、岸本会長の跡を継いだのは栄光学園卒の濱口篤志（1967年会長）さんで、

私は副会長に任命されました。しかし私は、二年次が終了した1967年3月に大学を休学し、広島市の郊外、長束にあったイエズス会修練院に入りました。

二年間の修練を終えて大学に復学したのが1969年4月。以来、カト学と本格的に関わるようになりました。私が大学を離れていた二年のあいだに学生運動が盛んとなり、上智大学でも激しい学園紛争が起きました。そうした時代に、石塚喜重さん（1968、69年会長）、木島祐一さん、今成勝彦さん、高橋陽太郎さん、関口知子さん、佐藤邦夫さん（1970年会長）、山邊雅晴さんと滋さんの兄弟、さらに安芸璋一さん（1971年会長）、戸川清さん、大宅一裕さん、佐々木清美さん、秋山かほりさん、辰巳禎一さん（1972年会長）、堀川るみ子さん、岡本正和さん（1973年会長）らが会長やリーダー、サブ・リーダーを務めていたことを思い出します。これらの人々と知恵を出し合いながら、紛争の余燼が残る中、立て直して実行した春の新入生歓迎キャンプ、夏休み中の夏季合宿なども良い思い出です。そして、その時代の指導司祭が、先年（2016年10月29日）帰天された尾原悟神父様でした。

尾原神父様は、イエズス会司祭となり、神学課程を終えて上智大学文学部史学科に赴任され、同時にカトリック学生の会の指導司祭となりました。私たちカトリック学生へのメッセージを短い言葉でまとめられたのですが、それは、「一致と派遣」という言葉でした。上智大学にあつてカトリック学生は同じ信仰を持つ仲間として、一致へと努める。しかし、それは内向きではなく、カト学から、それぞれの所属学科、所属するクラブやサークル、また所属する小教区教会に派遣され、そこで活動する。カト学は一致を深める場ではあるが、同時にそれぞれが活動する場、とりわけ各小教区教会に向けて派遣する場でもある。ですから、クリスマスなどいろいろな大事な典礼行事のときなど、自らの所属教会に帰つてそこで活躍しなさい、というのが、尾原神父様のメッセージでした。上智は上智で、カトリック大学として教職員や学生、その保護者や卒業生を対象にクリスマスミサやご復活のミサなどを開催するのですが、基本的には、首都圏に実家のあるカトリック学生は自分の所属教会に帰つて、その教会を支え、発展させていく使命がある、ということでしょう。現在でも大切なメッセージだと思います。

先ほども言いましたように、私が大学に復学したのが1969年4月で、ちょうどカト学10周年の年でした。皆さまも10周年記念誌についてはご記憶があるかと思います。当時、10周年を記念して何か冊子を作ろうということになり、どういう内容にするか、カト学内でずいぶん議論をし、時間も頭も使いました。紛争直後でもあり、卒業した先輩方の原稿を集めるのは難しいという状況で、いろいろ議論を重ねた結果、歴代会長が就任挨拶として書き残している文章を並べて、この10年の歩みを、それによって語らせることを思いつきました。これらの文章では、歴代の会長が就任にあたって、それぞれ抱負や取り組みたい課題などを語っている。そこで、それらを年代順に並べればカト学の創立時からの歩みが浮き彫りになり、会の歴史を明らかにできるだろうと考えたのです。今回は65周年ということで、また何か冊子をまとめて刊行すると思いますが、是非、いい形で会の歩みを記述して後代に伝え、10年後の75

周年、さらに2059年に迎える100周年をも視野に入れた記念誌を作り上げて、カト学の持続的発展に道筋を示して頂くたいと願っております。

話は変わりますが、周年行事ということであれば、今年、聖イグナチオ教会は現聖堂の献堂25周年を迎えています（1999年6月6日に献堂）。古い聖堂の献堂（1949年4月17日）から数えると75周年。さらに、聖イグナチオ教会は麴町教会であって、麴町教会としては88年、米寿を迎えています。といえますのは、JR四谷駅の麴町出口から番町小学校の方に向かう道筋の千代田区六番町に、以前カトリック中央協議会が置かれていたのですが、戦前、その場所には女子カルメル会修道院がありました。その修道院が練馬区上石神井の、現在のイエズス会修道院の奥まったところに移転したときに空き家となり、それを東京教区が引き取って麴町教会（幼きイエズスの聖アレジア教会）を開設したのです（献堂式は1936年3月22日）。その時点から数えると88周年というわけです。

ところがその教会は、1945年5月の大空襲で焼け落ちてしまいました。しかも教会が全焼しただけでなく、私たちが今いるこの場所、上智のメンストの正門から東門に通り抜ける道の四谷駅に近い一帯、おおよそ三角形の形状を呈している、この地帯も皆焼けてしまったのです。聖テレジア教会が焼けてしまったあと、ミサをどこで捧げるかというときに、上智大学がクルトゥルハイム聖堂を提供し、そこで日曜日のミサを祝うことになりました。

戦争が終わってから、上智大学は、空襲で焼けた四谷駅に近い一帯、この三角地帯を購入取得しました。大学の史料を見ると、大学には規定によりグラウンドが必要ですから、今後の発展を見据えて、この場所を大学のグラウンドにする予定でした。真田濠は、その当時はまだ埋め立てられてはおらず、将来ここを上智大学のグラウンドとして使うなどの考えは、思いもよらぬことでした。一方、上智大学の復興に伴い、当時の一号館講堂（現上智小劇場）を聖堂代わりに使ってミサを行うようになり、麴町教会の司牧はイエズス会に委託されました。

この委託には、次のような事情と背景がありました。ちょうどその頃、戦災で多くの小教区教会を失った東京教区にバチカンの皇庁から復興資金が届きましたが、当時の駐日バチカン使節パウロ・マレラ大司教は、「この資金は教区の諸教会再建に使い、麴町教会の再建はイエズス会に委ねたら」と土井辰雄東京大司教に進言しました。土井大司教はこの進言に首肯し、「麴町聖堂再建と所属信徒（約一二〇〇人）をイエズス会に委ねたい」との意向を示しました。イエズス会のブルーノ・ビットテル神父（カトリック復興委員会委員長）は1947年8月26日にこの提案を受け入れて、新時代にふさわしい教会の再建を確約しました。

この日、上智大学のグラウンド案は完全に消滅し、この地を新しい教会用地に定めて麴町教会を建設することになりました。しかし、その意味は、新しい教会建設にはバチカンからの復興資金を充当せず、教会建設と開設資金はすべてイエズス会が工面し、調達

する責任を負うということです。そしてこの日、土井大司教はヘルマン・ホイヴェルス神父を麴町教会主任司祭に任命しました。

その当時、上智の講堂を使つての日曜日のみサには連合国軍の外国人カトリック信徒も参加するようになり、一日に七回もミサを行つて対応しなければならぬという状況でした。そういう事情から、同年9月1日、連合国軍最高司令官派遣外交使節団を構成する各国のカトリック信徒代表が連名で、「新しい教会を都心の然るべき場所にはやく再建して欲しい」という要望書をビッテル神父に提出しました。これも追い風になって、建築計画が進められ、新しい麴町教会はイエズス会の創立者、ロヨラの聖イグナチオに捧げられることも決められました。こうした動向はバチカンにも伝えられており、教皇庁は1948年5月12日付で、麴町教会を無期限でイエズス会に委託された小教区教会とする特典を付与しました。

戦後間もないという状況下、建築の資金集めも資材調達も大変な苦労があつたようですが、世界の心あるカトリック信徒や教区、また要望書を提出した国々からの援助や贈り物に助けられました。同じ信仰をもつ人々が、戦後復興に立ち上がるとうとする日本の、それも都心の教会再建に心を向け、志を言わば「派遣」してくれたのです。日本と同じ敗戦国のドイツのいろいろな教区からもさまざまな援助があつたことも記憶にとどめておきたいと思ひます。こうして1949年4月17日、聖フランシスコ・ザビエルが日本にキリスト教を伝えてから400周年を迎えた年の、主のご復活の祝日に土井大司教の司式で献堂式を挙行し、ここに麴町聖イグナチオ教会が誕生しました。

まだまだ聖イグナチオ教会の歴史は続きますが、私の話の続きは、ここに持参しました現聖堂献堂25周年の記念カードでご覧ください。裏面にQRコードが付いており、これをスマホにかざして開きますと、先般の10月13日にアンドレア・レンボ東京大司教区補佐司教様の司式で祝つた25周年記念国際ミサの様子、今回刊行した記念誌『聖イグナチオ教会のあゆみ〜現聖堂献堂25周年記念略年表』の内容、教会のあゆみを短く紹介した動画など、すべて見ることが出来ます。本日ここに少々持参しましたので、ご希望の方はどうぞお持ちください。

カト学65周年のお祝いの言葉のつもりが、上智大学も属する小教区教会、聖イグナチオ教会の開設当時の話しに発展しました。先ほどサリ理事長もおっしゃつておられました、カト学は、上智大学のミッションのコアを握っています。ただしそれは、決して内向きではなくて、自分たちが一致するという面と、外に向かう面、つまり上智大学内の各所へ、また、上智から学外へ派遣されていくという面とがある。大学の共同体へ、各学部各学科の仲間へ、クラブやサークル活動へ、あるいは所属する小教区教会、家庭、職場、地域社会へと派遣されていく。やはり「一致と派遣」ということになるのでしょうか。この辺りの意味を深く汲み取つて自分のもの、自分たちのものとし、カト学自体もカト学の現役とOBやOGも、今後とも発展を続けて行つてほしいと祈念しております。ご清聴、ありがとうございます。

もっと偉い先輩方がたくさんいらつしやるのに、非常に僭越ですが、挨拶させていただきます。1993年神学部神学科に入學した、山内保憲と申します。先ほど昼食の時に菅原裕二神父様から、「65周年記念ミサの説教では私は過去を振り返るから、山内神父様、あなたのスピーチでは未来について語っていただけますか」と言われました。先輩の意向に反するようで申し訳ないのですが、少しかだけ過去を振り返りながら、現役世代へとつなげていく話ができればと思います。

先日オーストラリアのシドニーで、アジアのイエズス会学校の教員研修会 (Forming Ignatian Leaders for 21st century) があり、私は運営側として参加しました。各学校のリーダーになるための教員研修なので、イグナチオ的リーダーシップについて学びました。その中で、イグナチオ的、イエズス会的な学校教育のリーダーとは、どのような人物かを議論するプログラムがありました。その一つのキーワードが、Authenticity。正しいリーダー像でした。みなさんにとって、どのような人物が理想的なリーダーですか？信頼がおける人、相談にのってくれて、私たちをエンパワーしてくれる人、そして、イエス・キリストを感じさせるリーダーとは、どのような人物でしょうか？こういった問いかけについて、分かち合いをしました。みなさまも、この問いかけについて、どのように思うか、少し思い起こしてみてください。

私は、そのワークショップの時、ちょっと自分でも驚いたのですが、ぱっと思い浮かんできたのが、おじいちゃんのイエズス会員の方々でした。まずトマス・エセイサバレナ神父様です。エセイサバレナ神父様は、私にとってはカト学現役時代の指導司祭ではありませんでした。私が神学生になってから、霊的指導を受けていた神父様でした。次に思い浮かんだのが、時永正夫神父様でした。お二人の顔が、ワークショップの時に、ふわっと浮かんできました。お二人は、いわゆる「リーダー」というイメージとは異なるのですが、なぜか彼らの姿が出てきたのです。それはなぜなのか。彼らは、いつも私たちに寄り添ってくださるというイメージがありました。わざわざアポイントを取らなくても、いつでも時間をとって会っていただけだし、私たちの話を聞いてくださいました。そして彼らは何も具体的な指示はくありませんでした。彼らは、私たちに何かをやれとは、一言もおっしゃいませんでした。ただ、こちらから話しをして、聞いていただきました。そして、話しが終わった時には、不思議なことに明日に向かう力が与えられていました。ただ、悩める学生の私と、「共に」いてくださいました。そこから、カト学の仲間とか、カト学の先輩たちの姿も、ざーっと思いつき出されました。皆、何をやってくれたということではないのですが、「共にいてくれた」ということを思い出しました。

現在、私は上智学院カトリック・イエズス会センターで、上智大学職員として働いています。現役の学生とも近い立ち位置で接しています。ふと、自分が先輩たちにとって、私が理想と思っていた先輩方のような姿で接しているだろうか、すぐく反省します。正直言って、いつも時間に追われて、忙しくしています。彼ら彼女らが私のところに来た時に、何かゆったりと時間を取って

あげることができていないと感じ、反省しています。カト学で学んだこと、神父様方から指導を受けたことを、私は実践できているだろうか。これが、このワークシヨップでの気づきでした。

正直言いまして、私たちは、これは特に、私より上の世代に向けて申し上げるわけですが、それぞれの場所で、そんなに長い時間が与えられているわけではないと思います。それぞれに与えられた時間を、これから何に使うべきでしょうか。どのように過ごすべきでしょうか。カト学から受けたものを思いおこし、それをどのように伝えていくべきでしょうか。この65周年の機会に、少し立ち止まり、考えたいと思います。

先輩方や後輩を見ると、卒業してから、さまざまな分野で活躍してきてくださいました。ある方々は、カトリック学校やカトリック関係の出版社などで活躍され、日本のカトリック教会を支えていただいている、と感じています。また、家庭において、子育てにおいて、与えられた仕事において、それぞれ地道に、伝え受けたことを、さらに次に伝えることを実践されていると感じています。カト学には、つまるところ、学生の立場であれ、卒業生の立場であれ、私たちの信仰、イエス・キリストを、それぞれの形で証していくというミッションが与えられていると思います。若い後輩たちとも、私たちはしっかりと時間を取って、共に歩んでいく、そのような存在になれるようお願いしたいと思います。

さて、本日ここに来られていない方、とくに闘病中であられない先輩がいることもお聞きしています。ここで、私のある知り合いの方の話をさせてください。その方は、末期がんで闘病されていて、あと数カ月の余命しかないと宣告されました。そして比較的体調が良いときに、医師から、「一日だけ、家に戻っても大丈夫です。どうぞ一日を自由に過ごして、また病院に戻って来てください」と言われたそうです。そこで、その方は（女性ですが）何をしましたでしょうか。皆さんだったら何をなさいますか。自分の人生が終わりに近づいている一日、何をなさいますか。豪華なフランス料理を食べに行きますか、あるいはお寿司を食べに行きますか。その方は、自宅に戻って、家族のたまった洗濯ものを、洗濯したそうです。そして、今日のように天気の良い日だったのでしよう。一日の終わりに、その洗濯ものを取り込んだそうです。その時に、自分の人生の「幸せの匂い」をかぐことができ、大満足だった、というのです。その後、彼女は病院に戻り、神さまのもとに旅立っていかれました。

私たちそれぞれは、大きなことはできないかもしれませんが。私たちの人生では、ささやかなことしかできないと思います。それでも、最後に、私たちもまた、「幸せの匂い」をかきながら、先輩たちと同じように、旅立っていくことができたらと思います。65周年の記念にあたって、カト学に関わった一人ひとり、あらためて、私たちに与えられたこの時間をどのように使ってイエス・キリストを証していくか、それをあらたに確認したいと思います。これからの皆さまのそれぞれの人生に、神様からの祝福が多くあるようお祈りして、私の話の結びとさせていただきます。どうもありがとうございます。

山村 古志郎 1956年度経済学部経済学科入学

初代会長山村古志郎さんに2023年5月開催のASF(オールソフィアンズフェスティバル)のご案内を郵送さしあげたところ、ご丁寧な欠席連絡のお電話を頂きました。その際、カト学創設の経緯を、問わず語りで懐かしそうにお話し下さいました。以下は、その貴重な記録を書面に起こし、2023ASF当日に披露させて頂いたものです。

(4/21/2023談 構成・澤出路子 1981年度文学部社会学科入学)

* * * * *

地方出身で、大学内の学生寮に入っていたが、都会の大学になかなか馴染めずにいた。

当時、既にカト研はあったが、敷居が高くて入り辛かった。教会も同様で、既に出来上がっている人間関係の中には入っていき難いものがあった。

同じような思いの地方出身者は他にもいるのではないかと思い、三年生の時にベジノ神父様に相談したところ、誰でも気軽に集まれるような団体があったら良いのではないか言ってくださり、全学のカトリック学生に声をかけてくださった。四〇〇名くらいいたのではないかと思う。

条件はカトリック信者である、ということだけ。他のサークルのように、何かの活動をするを目的とした団体ではなく、気軽に誰でも集える懇親の場を提供しよう!というのがカト学の始まりだった。

卒業後は商社に勤め、最初の赴任地は大阪、その後長らく海外生活が続いたため、カト学とは疎遠になってしまっていたが、今でもカト学が存続していること、そして、このように繋がりを大切にしよう!と後輩たちが動いてくれることを大変うれしく思っている。

高齢のため外出が難しく、出席はできないのが残念だ。ご盛会をお祈りしている。

* * * * *

あるカトリック神父との出逢い

大宅 一裕 1969年度外国語学部ドイツ語学科入学

僕が初めてフリン先生に会ったのは六〇年前神戸の六甲学院に入学した一二歳の春でした。

先生は僕の人生で身近な存在となった初めてのアメリカ人でカトリック神父でした。

バスケット部のコーチでもあった先生は当時すでに四〇歳を過ぎたお年にもかかわらず中学生の我々に負けないくらいの俊敏さで元氣いっぱいプレイと一緒にされ僕も多く級の級友も先生に憧れてバスケット部に入学しました。当時先生の部屋には我々が初めて見るバックギャモンやドミノなどのゲームがあり本棚にあったカラー印刷のアメリカの雑誌も我々にとってはすべてがワンダーランドでした。先生は教区から払い下げの中古のオートバイに乗って欠席している生徒の家を訪ねて個人補習もされていました。当時先生が自室でタイプで打って作成された英語の教科書 *Progress in English* は後に広く日本中のミッシオンスクールでも使用されるようになりました。

中一の時から先生が指導された公教要理は大人気で中三になれば半分以上の受講生が洗礼を受けました。僕も一緒に洗礼を希望したのですが父親は故なく猛反対。先生はバイクに乗ってわざわざ我が家まで説得に來られ父親は恐縮してあたふたしあつげなく僕の洗礼を許すことになりました。

先生はよく『*God may lead us in a way we did not plan to go*』という言葉を黒板に書いていらつしやいましたが中学生の僕にはその意味をあまり理解しないうままでした。その後の僕の人生はというと大学受験の一ヶ月前に父親が急死し大学進学も危ぶんでいましたが遠回りして思いもよらなかつた上智大学に入学でき生活費を稼ぐためアルバイトに明け暮れやつの思いで卒業でき就職した会社では駐在予定だった海外支店が突然閉鎖されて全く希望外の国内業務に就き九年後シンガポールに配属されそこですっかりアジア世界に魅了され六年後の三七歳のとき香港で独立起業して天安門事件、中国返還、雨傘運動など怒涛の歴史を体験しながら世界を転々とする四〇年間になりました。

今は神は予測もしないところに導くというあの時の先生の言葉をしみじみと噛みしめています。

卒業生によって編纂された先生の自伝『ロバートフリン あるカトリック神父の足跡』を読んで先生が『人生で最も幸せを感じたのは1969年サバティカルの年コルカタでマザーテレサの活動を手伝った三日間だった』という一節を読んで思い立って2007年初めてコルカタのマザーの家を夫婦で訪ねました。毎朝六時からマザーの家でのミサにマザーの会の修道女の皆さん

と与り朝食後指定されたボランティア先は知的障害の孤児が生活している『Daya Dan』という施設でした。カナダ人のシスターの指示で施設の子供たちのシーツやブランケットの洗濯を屋上の洗濯場で行いました。マザーの家では町の人と同レベルの生活に従うというマザーの理念で洗濯機はありません。世界中から参加するボランティアと三〇人の子どもたちの大量の洗濯物を大きな洗濯槽に洗剤を入れて力を合わせて手洗いで汗を流しました。洗濯も一段落して穏やかな気分になって屋上の壁にもたれながら一休みしていると施設のひとりの男の子が近寄ってきて僕の手を握り身体を寄せてきました。僕はそのときぼかばかした陽だまりの中で無心で僕に寄りかかってくる少年の体温を感じながらたまらない幸せ感に浸っていました。

コルカタでの感動の四日間を過ごし夜行列車で二〇時間かけて遠藤周作の『深い河』の舞台にもなったベナレスにあるマザーの家の死を待つ家を訪問しました。

そこには十数人の体を横たえた人たちが生活していて案内してくれたシスターによればほとんどが死を前にインド各地から聖地ベナレスに辿り着き行き倒れになっていたヒンズー教徒とのこと。ちょうど昼の食事どきでアルミの食器に食物を配るのを手伝いました。こちらの目を見て手を伸ばして『ナマステ』と言って食事を受け取る人たちの瞳を見ると明日をも知れぬ日を生きる死を待つ人たちの命の輝きのようなビームを受けたような感じになりました。お世話しているインド人シスターは『私たちは彼らの救いでもあり彼らは我々の救いでもあるのです』とおっしゃっていました。

プリン先生は卒業生の結婚式の説教の中でよく『All the sweetness is at the bottom of cup』とおっしゃっていました。七五年の人生を生きてきてマザーの家でもタイの奥地の少数民族の村でもミャンマーの難民キャンプでも地球のThe bottom of cupで神の賜物とも思える至福のThe sweetnessを期せずして享受させてもらってきました。

2009年2月7日プリン先生はロヨラハウスで帰天されました。享年八九歳。たまたまこの日に呼び戻されたように海外から日本に一時帰国していた僕はイグナチオ教会でのお通夜、葬儀にも参列させていただくことができ、上智在学時代カト学で知り合い縁あって苦楽を共にしてくれている妻ともやがて召されて逝く日には先生が眠られているイグナチオ教会のクリプタの一隅に入らせていただけることになりました。

God may lead us in a way we did not plan to go.

カト学65周年記念誌に寄せて

杉浦 正和 1969年度経済学部経済学科入学

杉浦 真理子 1972年度文学部国文学科入学

私が入学した年は、まさに学園紛争の真ただ中であつた。その前年、上智大学は全国の大学で初めて機動隊を学内に導入した。入学式は、土手の下にある運動場で行われ、周囲の土手には機動隊が待機し、騒然とした雰囲気の中での開催となつた。私はそんな中、希望に胸をふくらませて入学し、カトリック大学である母校で、何とかカトリック信者としての使命を果たしたいと考えた。ほどなくして、カトリックの学生たちが集まる「カト学」の存在を知り、部室を訪ねた。そこは小さくて雑然とした部室で、何をしているのか分からないような状態であつた。そんな中、新入生歓迎合宿の通知が届いた。たしか6月だつたと記憶している。さらに8月には夏合宿もあり、そこには指導司祭の尾原神父様や、当時神学生だつた高祖神父様も参加されていた。

その後、一年生を中心としたグループを集め、リバス神父様を指導司祭として迎え、テーマを決めてディスカッションなどを実施し、また山本襄治神父様には宗教の授業をお願いするなど、積極的に活動した。二年生の時、私はカト学の活動があまりにもサロンのであることに疑問を抱き、もつとカトリック精神を中心とした活動にすべきだと主張し、会長に立候補したいと先輩方に直談判した。しかし、あまりに突飛な提案だつたため、「それなら典礼委員長になつて頑張つてくれ」と先輩方から言われたことを覚えている。積極的に行動したのは、その二年間で、尾原神父様からは「ここは高校時代のような勝手な行動は許さん」と叱責されたこともしばしばであつた。やがて三年生になると、私は次第にやる気を失い、後輩たちからは「あれだけあくだ、こくだと発言しておきながら、何も行動しないのは無責任だ」と言われてしまった。

そして、四年生になり、新入生歓迎合宿では、大宅さん（外国語独語69年入学）と結託し、新一年生の女の子一人ひとりに面談を行った。その際「もし、学内で僕に挨拶をしてくれたら、学食でコーヒーをごちそうするよ」と言い放つた。すると、たった一人「杉浦さん、こんにちは！」と本当に学内のメイנסトリートで挨拶してくれたのが、今の妻。

こうして彼女は「運命のコーヒ一杯」で、長く「地獄の日々」に足を踏み入れたのだ。そして気づけば、今年で金婚式。お互いよく耐えた・・・と笑いながら。その記念として三週間、ドイツ、フランス、イタリアでの教会巡りを中心とした旅行を楽しんできた。

(杉浦正和)

高校3年生の復活祭に洗礼を受けた私は、大学案内パンフレットに「カトリック学生の会」という項目を見つけた時「私もここに入れるのね」と嬉しかったと同時に、不安を感じたことを今でも覚えています。洗礼を受けたばかりの私が、皆さんの話についていられるかしら。いつも堅苦しい議論をしている場所だったらどうしよう。

しかし、入学してすぐ行われたオリエンテーションキャンプに参加すると、その不安は払拭されました。同じ信仰を持った仲間が集いが、こんなにも心地よく感動的だったとは！

「こんにちは」と『勢い』で挨拶したのが運の尽き。カト学先輩の夫と連れ添って、五〇年が経ちました。（すでに先輩後輩の域は取り払われていますが……）今から三〇年前くらいに、所属教会の主任司祭から「夫婦で高校生の指導をしてほしい」と頼まれ、数年間二人でリーダーをさせていただきました。カト学での経験が役立ったことは言うまでもありません。

そしてあの頃高校生だった彼らが、今では教会の担い手として活躍しています。彼らを見ると、バトンをつなげたことに感謝の気持ちでいっぱいになります。

カト学も65年間歴史を刻み、次の時代へと引き継がれていくことでしょう。65周年記念を企画運営してくださった皆様、本当にありがとうございます。

Deo Deo Gratias Deo (神に感謝) 今日までの日々

Laudate Deum Laudate Deum (神を賛美) 今日からの日々

(杉浦真理子)

カトリック学生の会65周年に寄せて

望月 伸一郎 1978年度法学部法律学科入学

私たちのカト学時代、合宿やミサでよく歌っていた聖歌に『種まく人、それはイエス』がある。イエスの語ったたとえ話に基づく歌詞は次のようなものだ。

♪（前略）ある種はすぐに芽を出した。しかし根のない芽はかれてゆく。いばらの中に落ちた種は、伸びるいばらに隠される。ある種はよい土に落ちて、大きく大きく育つてく。やがてそれは実を結ぶ。多くの多くの実を結ぶ。… ある種は神のみ言葉で、私たちが良い土ならば、多くの多くの実を結ぶ♪。

あれから四〇年あまり。還暦もとうに過ぎた今、人生の来し方を振り返りつつ考えてみる。

「はたして私は、この歌で歌われるどの土だったのだろうか？」

…たくさんのいばらに覆われてしまってもいたし、結局は厚みのない薄い土だった。この歌で歌っていたような、たくさんの収穫をもたらず良い土であったとはとても言えない…。

それなのに、まだ社会に出る前のあのカト学時代、なんともまあ無邪気に能天気な『種まく人、それはイエス』を大声で歌っていたことか、と恥ずかしくさえなってしまう。

しかし一方で、これも社会で様々なことを経験しての実感なのだが、もともと潜在的に素晴らしい力を持っている人は、たとえ置かれた環境が最良のものでなくても、それこそコンクリートの割れ目からでもしっかりと芽を出していく植物のように、必ずその力を発揮して伸びていく。そのような実例をいくつも見てきた。

よい種でありさえすれば、たとえどんなところに蒔かれようとも、どんな苛酷な環境に置かれようとも、逆境をはねのけて、その生命力を維持しつつ、枯れないばかりかしっかりと根をはっていく。

去年、カト学65周年を機に懐かしい顔ぶれがミサに集った。ともに主の食卓を囲み、心をあわせて祈った。カト学時代に蒔かれた種は、しっかりと生きていく。私を含め、みんなの中に蒔かれた種が枯れることなく今でもしっかりと生きていくからこそ、こうして集まることができた。

そのことがとてもうれしかった。

カトリック学生の会65周年記念によせて

純心聖母会 久松 久美子 1979年度理工学部化学科入学

上智大学カトリック学生の会(以下、カト学)65周年、心よりお祝い申し上げます。この記念すべき節目に寄稿の機会をいただき、誠に光栄です。カト学の歩みと私の人生が同じ年月を重ねてきたことに深い巡り合わせを感じます。「神のなさることは時にかなって美しい」(コヘレトの言葉3章11節)という言葉を生人の節目節目で深く実感するばかりです。

高校卒業後、カト学で出会った方々や経験はかけがえのないものでした。それまで知らなかった多くのこと、まさに未知の世界に触れることができ、大切な経験をさせていただいたと心から感謝しています。温かくご指導くださった神父様方との出会いは、カト学での信仰生活に豊かな彩りを与えてくれました。春夏の合宿、ボランティア活動、クリスマスのミサといった行事、そして共に語り合った先輩や友人たちとの交流は、どれも忘れられない大切な思い出です。授業の合間にカト学の部屋で過ごした時間も、今となつてはとても懐かしい思い出です。上京する折にはできる限りイグナチオ教会に立ち寄って祈りを捧げるようにしています。が、母校が時代とともに発展し続けていることに喜びを感じます。また、研修会などでカト学のOB・OGの方々と再会するたびに温かい気持ちになり、新たな活力をいただいています。かつて共に祈り、今も互いに支え合ってくれる友人がいることは、本当に神様の恵みであり、これ以上ない幸せです。これこそ、カト学のメンバーであることの一番の喜びではないでしょうか。

これらの経験は、卒業後、今の生き方を選ぶ上で計り知れないほど貴重でした。特に、学生時代からのささやかな願いであったインドのコルカタ訪問が、約一〇年前、マザー・テレサの修道会施設でのボランティアとして実現したことは、私にとって大きな喜びです。午前中は世界各地からのボランティアの方々を送り出し、午後は私自身も施設でお手伝いをしました。「大きいことはできないけれど、小さいことを大きな愛を込めて」(Do small things with great love.)というマザー・テレサの言葉は私の大好きな言葉であり、修道者としてまた教育者として生きる上での柱です。この「小さいことに愛情を込める」という生き方は、まさに学生時代にカト学、特にボランティア活動で培われたものだと感じています。

そして今、私は純心聖母会の修道女として、鹿児島にあるカトリックミッションスクールで中学1年生の宗教を担当しており、この精神については折に触れ、生徒たちにも語りかけています。生徒たちの新鮮な驚きや素直な表現に触れるのが本当に嬉しく、私自身も毎週の授業を心待ちにしています。様々な思いを抱える生徒たちの心に届く言葉や温かいまなざしを日々探しつつ、教壇に立たせていただいています。

65年の歴史の中で、カト学はキリスト教の精神を大切にしながらも、時代の変化に柔軟に対応し、新しい活動にも臆することなく歩んでこられたことと思います。教皇フランシスコが「福音の喜びは、個人主義に陥ることなく、分かち合いを通してこそ見出される」（使徒的勧告「福音の喜び」より）と説かれているように、カト学で育まれる力が、他者を思いやり、共感し、共に歩むという人間としての真の強さにつながることを心から願っています。カト学での学びは、その後の人生において心の道しるべのように私たちを導いてくれるのだと信じています。信仰を通して自分自身を見つめ、他者との関係を深め、社会に貢献しようとするこの学びのプロセスが、卒業後、それぞれの道に進んだ学生たちをそとと支え、優しく導く力となってくれることでしよう。

今後、カト学が70周年、80周年、そして100周年と、さらに豊かな歴史を刻んでいられることを心より願っております。そして、その活動がこれからも多くの学生に良い影響を与え、社会に希望をもたらす存在であり続けることを確信しています。

末筆ではございますが、カト学の益々のご発展と会員の皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

今、ここで

菊地 智久 1979年度経済学部経済学科入学

今年は「敗戦」八〇年目である。世間一般には「終戦」と言われる。言葉は便利なもので自分が聞きたくない言葉を言い換えることができる。第二次世界大戦に紐づけられれば United Nations を連合国でなく国際連合と訳しているのも役人が都合のよい言葉に言い換えたように思われる。敗戦前の1944年「一般的国際機構の設立に関する提案」を訳した外務官僚が敵対する連合国が将来設置する国際機構をその名称にすたくなかったのだろうもちろんその時点で日本が加盟するかどうかわからなかったであろう。2018年聖書協会共同訳「聖書」が刊行された。手元にある1955年訳（共同訳になる前）、1988年訳からいくつも表記・用語が変わっている。カトリック側から見ればドンボスコ社発行聖書やフランシスコ会訳の聖書と見比べれば、原文が同じなのかと疑いたくなるような箇所もある。ギリシア語もヘブライ語もわからない私はただただ「ふくん」と読み流すしかない。福音書は伝聞と資料をもとに書かれたもので共観福音書間でも同じ場面を違う表現で登場人物がことなることも記されているのだから、記者、翻訳者の意図、解釈が多分に入り込んでいると思っただろうが良いだろう。

さらに言えば、“The Five Gospels-What did Jesus Really Say?”の研究ではイエスのものとして記されている言葉の82%は実際には語られていないらしい。ここまでくると聖書の何を信じてよいのかわからなくなる。いやいや、我々が信じているのは聖書ではない。福音書は「福音記者」が残した伝書であってそこから何を読み解くかである。

“Here & now、私が受洗後四五年間大事にしてきた言葉である。今ここで私は何ができるのか、さらに言えばイエスがここにいたら何をしていたか。もちろん私にはイエスがしたことができるわけではない。でもそれを念頭に行動を起こすことが大切だと考えている。実際には踏み出せないことのほうが多い自分がいるだけなのだが。

ところで、皆さんは自分がキリスト者であることを周囲に明かしているだろうか。公言するものではないが、私は何かの機会に話題になれば積極的に証しすることになっている。それで関心を持ってもらえればと思っている。日本ではキリスト者は少数派で、キリスト教の知識が少ない方が多いことに驚かされる。ヨーロッパに旅行して、教会や美術館を見学してきた友人がさっぱり理解できなかったとか、なぜイエスターは毎年違う日なのかとか質問をされることもある。キリスト教のこと、カトリックとプロテスタントの違い、聖書のこと、教会のこと。今年はコンクラーベが実際でも、映画でも話題になった。うまく応えられないこともあるが、むしろ信徒でない方はこういうことに関心があるのかとか、我々と違った見方をするのかと気づかされることありがたい。

海外で暮らすと事情が変わってくる。私はイスラム教を国教とする国に二年半赴任していた。事務所にはイスラム教徒（現地人、周辺国からの出稼ぎ）、カトリック信徒（フィリピン人他）、ヒンドゥー教徒（インド人）、仏教徒（スリランカ人と外国人登録証に仏教徒と記した日本人）、無宗教はビザが下りない）がいた。おもしろいもので外国人登録証にキリスト者と書いてある私へのイスラム、カトリックの方々の対応が他の日本人と明らかに異なっていた。珍しい日本人と映ったのかもしれないが、それ以上に一神教の信徒であることに親近感を持っていたものと思う。

多種多様な宗教、教えがある中でキリストに見いだされキリスト者となったことを誇ったり、自慢したりするものではない。しかしキリスト者は福音を告げ知らせる役割を負っていることを自覚しなければならない。「アナタハ神を信じますか？」などと説いて回ることはしないが、自分がキリスト者であることを明かして、社会の中では普通に暮らしていることを見せるだけでも十分だと私は考えている。私を見て教会に行ってみようとか洗礼を受けようなんて思う人はいないだろう。でもちよつと関心を持ってもらえたら嬉しい。

私の中の蒼いフォトグラフ

シャルトル聖パウロ修道女会 加藤 美紀

1984年度外国語学部ポルトガル語学科入学

「写真はセピア色に／褪せる日が来ても／輝いた季節忘れないでね／蒼いフォトグラフ」（詩：松本隆）。1983年リリースされたユーミンの『蒼いフォトグラフ』がかすかにリフレインする淡いの中で、記憶の宝箱から青春の想い出の糸を手繰り寄せてみます。

岩手県釜石教会で「希望の巡礼者と白百合のころろ」について話をさせていただいた帰り道。大船渡、気仙沼、南三陸、石巻、松島と沿岸部を車で走らせると、震災で海に呑み込まれた方々の声なき声が聴こえてくるようでした。暮れなずむ漁港に灯りが燈ると、帰天した同期の森ケンこと森謙三氏（84外英）と先輩の増田祐志神父様（哲82）の面影が蘇りました。

それはある夏合宿のこと。グループ代表でスマートに発表した森ケンに対して、「信仰は自分の体験で語らなければ」と時さん（時永正夫神父様）の愛のムチが飛び、一瞬空気がこわばるも、森ケンはすぐに立て直しました。教会の教義でがんじがらめになって身動きがとれないみじめな自分。でも夜空に煌々と輝る満月を見た瞬間、このままの自分でよしとされていると悟った。この体験談は皆を感動させました。ソフィア祭バザーを終え同期で旧イグナチオ教会のミサにあずかると、森会長の顔には達成感が充ちていました。

神学院に入る前だったでしょうか。増田先輩が「祐の字は神の右に立つ者という意味なんだよ」と自分の名前に言及した時、いつもの得意気な表情ではなく、畏れているように見えました。2019年3月のお通夜の席で、大勢の弔問者が将来を囑望された司祭の早世を惜しんで涙に暮れる中、不謹慎にも私が「神父様にならなかつた方が幸せだったのかな」とつぶやくと、隣にいた姉が「司祭職は自分では選べないもの。増田君は学生時代からエセサ（エセイサバレナ神父様）に毎日、あなたは神父になる」と言われていた人だから」と答えました。今は神様の側近くにいると信じます。

合宿で生まれたドラマは数知れず。ラストに受け取るみんなの寄せ書きは、まるでご神託のよう。合宿所に向かうバスに乗り込む時、くじを引いて、そこに書かれている人のために祈る、という素敵な企画もありました。帰りのバスで「あなたのエンジェルは私よ」と告白するのも乙。合宿のたびに白熱ディベート、冒険心をくすぐるオリエンテーリング、趣向を凝らしたレクリエーション、歌に踊りにキャンプファイヤーで盛り上がり、存分に謳歌したのですが、入念にリサーチしてプログラムを組んでくださった実行委員の方たちが見えないところで全部お膳立てしてくださったおかげで、今も「輝いた季節」なのだ感謝の気持ちでいっぱいになります。

気づけばカト学から足が遠のいても、ふらりと会室に立ち寄ると、必ず誰かがいて、いつ現れても弾んだ声で歓迎してくれる。日頃の不義理を一言も責めずに、去り際には笑顔で手を振って送り出してくれる。私にとってカト学はかけがえのない青春の居場所でした。

学科の友人から「カト学って何をやるサークルなの？」「どんな活動してるの？」と聞かれると答えに窮したものです。もちろん聖書に照らして社会課題の研究もすれば、ボランティアもする。そうしたDoingの価値もあったかもしれない。でも何をすることもなく、ただ一緒に過ごしたことによって、残ったのは信仰を同じくする仲間との目には見えないつながり。『星の王子さま』の一節「大切なものは目に見えない」の世界に通じるような気がします。出会ったみんなまで共にいられたことが永遠の宝物。数値で測ることできないBeingの価値が確かにそこにあつたのではないのでしょうか。

その中心に宣教師が存在したことを憶えていたいと思います。コンパの席でもエセサが語つたのは「何度生まれもイエズス会士になりたい」という志。三年前、地元紙「河北新報」朝刊の連載エッセイの中で、クリスマス会を盛り上げてくださった想い出とともに、個人的な体験を紹介しました。修道会入会前、エセサに相談に行つた時のこと。「美紀ちゃんは三誓願のうちどれが難しいと思う？」と聞かれ「人間が好きで愛着が強いから貞潔は辛しい、自分の思い通りに生きたいから従順は窮屈だけれど、物を大切にするので清貧は困らないと思う」と答えると、「それなら清貧で苦勞するでしょうね」と見事に予言されました。それが盲点だったということでしょうか。

その会話の中で「まさか美紀ちゃんがシスターになるとは思わなかった」と驚きつつも、一つだけ褒めてくださったことがあるのです。「いえ、私はそんなことないです」と日本人の口癖で否定すると、すかさずエセサは「神様が与えてくださったタレントだから、私たちはNoと言えません」と諭されました。このようなイエズス会の司祭・宣教師の生き様に私たちが今も導かれていることは間違いありません。

あの時たしかに友がいた。師がいた。仲間がいて、私たちがいた。その真ん中にキリストがいた。遠くからリフレインが聴こえてきます。「いつか何処かで逢つても、変わらないねって、今の青さを失くさないでね、蒼いフォトグラフ」。

あの若き日々に与えられた関わりから

フランススコ会司祭 松本 巖

1984年度神学部神学科入学

カト学65周年。そして「84入学」の私たちは今年「還暦」を迎えました。まったくピンときません。特に修道司祭の私には定年退職がありませんし。入会者不足の今どき、八〇歳を過ぎても現職で働かされてもいますし。

上智卒業から三五年以上もたつてしまった昨今、カト学を再体験する関りをいただきました。二年後輩から卒業以来のコンタクト。「余命六か月を宣告されました」と。「信徒でない夫と暮らし、娘たちにも洗礼を授けず、教会から遠のいています。でも、最後は教会に戻りたい」との思いが綴られたお手紙。きつい治療の合間に、ご家族との旅行、カト学同期を自宅に招いてのホームパーティー。彼女のLINEに素敵な写真が掲載され続けます。その中で、私も上京し、彼女の叔母が残された茶室で、ゆるしの秘跡、病者の塗油、聖体と、秘跡の三本締め。ゆつたりとした時間の中で、心揺さぶられた時間を私は生涯忘れることは無いでしょう。普段、学校法人の経営や雑務で心をすり減らしている自分にとって、久しぶりに「主は、今 生きておられる♪ 我らの内におられる♪」と、実感させられた静かな癒しの希望を感じた時間でした。

彼女が帰属することになった教会では、カト学OGの先輩が教会事務受付を担っておられ、その縁で主日のミサの朗読をするほどの関わりを持つことができました。迎えた葬儀ミサは、教会聖歌隊の歌声の中、カト学の仲間たちが久しぶりに共に集い、新たな旅立ちに立ちあわれました。

教会は、現代世界憲章の中で宣言します。「愛と愛が形作つたものは永遠に残る」と。この世界に不変、不滅のものなどありません。すべてがはかなく移ろい壊れ無くなっていきます。しかし、苦難や死によっても断ち切られぬ永遠の命の絆、つながりがあるのだと。先日のカト学65周年ミサのなかで、私は、直子さん、森ケン、増田さん、エセサ、時さんを想い、祈念しました。

さあ、還暦です。日常の中で時間的限界も感じてきています。だからこそ、「愛と愛が形作つたもの」のために、余生を捧げたものです。できうる限り。

カト学での関わりと繋がり

藤原 和隆 1985年度法学部国際関係法学科入学

カト学が65周年を迎えられたこと、先輩方から今の学生の皆様まで長きに渡り活動が継続して来られたことに敬意と感謝を表します。カト学で出会った仲間、お世話になった神父様とは、他のサークル活動とは質の異なる深い付き合いをさせて頂いたと思います。信仰に基づく繋がり、心の深いところでの信頼や交流が、学生時代のみならず、卒業後においてもより強く感じられる気が致します。私は1985年に入学会し、カト学に入会しました。当初はもつと社会活動的な要素を期待していたため、カトリック学生がただ集い、週二日ミサを準備したり会室で駄弁ったりという実態に何となくぬるさを感じていました。(飲み会だけはハードでした)ただ、学年が上がるにつれ、同じカトリックでも様々な考えや示し方があり、色んなメンバーが信仰をベースに気楽に集い語りあえる場、各自の個性を生かせる場としてのカト学の価値を徐々に理解するようになりました。

指導司祭はエセイサバレナ神父様と時永神父様でした。お二人はタイプは全く違いますが、社会に出てからキリスト者としてどう歩んでゆくかが重要であるという点を共通して説いておられたように思います。一時の派手な活動を志すよりも、自分の信仰を見つめ直し、日々の生き方の中で実践していくことが大切であると思えるようになりました。以下では心に残る三人の方について記したいと思います。

○時永神父様

時永神父の印象は当初は芳しくなく、何やら取っ付きにくい年配の方、というものでした。が、当時住んでいた大森のアルバイト先に大森教会の信者さんがおられ、「上智なら時永、あの人はいい神父だよ」と言われ、そんなもんかと半信半疑でおりました。二年生の時に、エセイサバレナ神父がサバティカルのため時永神父が指導司祭を代行され、付き合いが始まりました。印象深かったのは合宿の際、時永神父が夜に一人遅れて電車で来られたのにお迎えの車が行っておらず、激怒された事件です。田舎の駅で待ちぼうけを食らった後、深夜に宿泊所に到着するや、運営役員らが一同に並べられ、大変なお叱りを受けました。皆眠気も吹っ飛ばしながら、執行学年であった一年上の先輩方を中心に反省の弁を述べたのですが、神父のお叱りは尤もな点が多く、私は不思議と怒られた気がしませんでした。むしろ、「誇りを持って仕事をせんと！」と言われた事で、自分の使命をきちんと果たす気構えを叩き込まれた思いがあります。

その後、時永神父がある約束を忘れ私がつっぱかされた事があり、それ以来距離が縮まり、聖書研究会にも参加するようになり

ました。S Jハウスの食堂でのアルバイトの時にもよく話に来られ、食堂スタッフと最も親しい存在でした。

卒業後、金子雅是さんの呼びかけで社会人向けの聖書研究会もご指導頂きました。単なる聖書の解釈にとどまらず、経済や国際問題など幅広い材料を用いて考えるネタを与え、ものを見る目を育てて頂きました。ミサでも同様ですが、必ずその時の「キーワード」を示し、考えさせるスタイルが特徴でした。

○増田祐志神父様

私が一年生の時の四年生で、学生時代はよく飲まされた印象が強いです。イエズス会に入られ、米国ボストンへ留学されていた時に訪問させて頂きました。アカデミックな環境を満喫されておられました。私の到着翌日に9・11の同時多発テロ事件が発生、まだ時差ぼけやまぬ朝に「藤原、大変な事が起こったぞ!」と部屋に飛び込んでこられました。その後予定は殆どキャンセルとなり、増田さんに町を案内頂きつつビールやワインを片手に沢山語り合ったことを強く覚えています。当時のカトリックでは先進的な考えや動きを教わりました。日本に戻られた後は神学部やカト学の指導でもご活躍されましたが、道半ばで病に倒られたのは大変残念です。

○森謙三さん

私の一つ上の会長をされたのが森謙三さんでした。英語が得意の森さんは「Stand Forth」というテーマを掲げ、今現在の視点ではなく一歩前に進んだ位置で物事を考えようと呼びかけられました。当時はあまりピンと来なかったのですが、後々その意味や大切さが腑に落ちる場面が何度もあり、我々の先を見ておられたのだなと感じました。誰からも愛され、華も情もある方で、後輩一同よく可愛がつて頂きました。病のため早世されたことはとても悲しく残念ですが、ご家族や教師時代の教え子達が立派に育っている姿を見ると、多くの実りをもたらされたことが分かります。

カトリック作家の若松英輔氏が「亡き者たちの訪れ」という著作で、亡くなった人は、それで終わるのではなく、残された人々により深く大きな影響を与えうると述べておられます。

私はカト学での繋がりを考えたとき、その思いを強くします。

65年の間に、カト学を通じて関わり、教えを受けたことは、たとえ先人が亡くなられた後も、それに続く人たちの間でずっと生き続けていくように思っています。

何より、イエスこそがその見本であるとも言えるでしょう。

私にとってのカト学

里見 康介 1986年度文学部史学科入学

かれこれ四〇年近く前に入学式をむかえ、建て替え前のイグナチオ教会での入学記念ミサで私たちの大学生活は始まりました。その時、教会に颯爽と現れたのが、当時のカト学会長のM氏でした。大学生とはかくも大人びているものかと尊敬の念を抱いたものでした。それ以来、私のカト学との関わりが始まり、カト学が織りなす出会いと別れは、要所要所で私の人生に大きな影響を及ぼし、現在に至る私の人生を形づくりました。

ちなみに私は、妻とはカト学で出会いました。そのような夫婦を何組か知っている我が家の子供たちからカト学は出会い系サークルと呼ばれ、そう信じられています。

結婚後しばらくして私は、S Jハウスでバツタリ出くわした神父さんの紹介で、勤めていた会社を辞めてカトリックの学校の教員に転職しました。転職を決める前に、一度その学校を見に行った時に校内を案内してくれたのが、一足先に転職して教員になっていたあのM氏でした。

さらにその後、仕事で上智大学と関わったのですが、その大学側の担当者が在学中は串友でしか会ったことの無かった先輩であるイエズス会の増田神父さんでした。

このように在学中に始まったカト学とのかかわりは、卒業後も私の人生の節々につきまといてきました。

今は既にお世話になったエセイサバレナ師、時永師のみならず、その生きざまを見せてくれた増田師もM氏も帰天されました。昨年はカト学の同級生も見送りました。これらのカト学を通しての多くの方々との出会いと別れの中には、常に信仰という共通の軸を持つもの同士の信頼と安心がありました。

私にとって大きな影響を与えてくれたカト学は、65年間にわたって多くの方々にも影響を及ぼしてきたことと思います。そしてカト学の織りなす私たちの関係は、これからも聖霊に守られて、連綿と受け継がれていくと確信しています。

土臭いキリスト

塩田 周三 1987年度法学部国際関係法学科入学

九年近くの米国滞在から帰国し、一八〇度違う四年間の男子校生活を経て、晴れて東京で「共学」の大学生活に胸を躍らせながら入学したものの、最初に入ったテニスサークルの呑み会のキャピキャピ具合に面喰い、どうにも居心地が悪く一週間で退会した。行き場を失った自分の心の抛り所となったのがカト学の会室だった。串友での激しい呑み、新歓合宿での「けつつあん」、トイレ直行の「電気ブランいつき」等、温かくも不条理なノリが、結局大好きだった中高時代を彷彿させ、懐いてしまった。

そもそも上智の国際関係法学科を目指したのは、高校時代に現社の先生から紹介された「南北問題」に影響を受けた結果だった。アメリカ滞在中は、自分よりがたいが良く文化的にも進んでいる（と当時は思っていた）アメリカ人になりきるべく全力を注いでいたが、帰国時にはウォークマンなど先端技術に溢れる日本を目の当たりにし、どちらも先進国で育った自分にとって、世界の仕組みの裏側を覗いたような感覚を持った。高校二年時には、学校から数人派遣されてインドを訪れ、マザーテレサの「死を待つ人々の家」をはじめ各地を回り、その実情に衝撃を受けた。この経験から、大学ではさらに深掘りをしたいと思った。

二学年先輩で、後に会長を務められた藤原さんと南原さんにお誘い頂き、翌年春には初めてフィリピンを訪れることが出来た。フィリピンは何回か訪れたが、その中で記憶によく残っているのは、最南端のミンダナオ島のあるミシヨナリーで体験したミスだった。自分は高校時代からずっとロックバンドをやっているのだが、あれほど「ロック」なミスに出会ったのは初めてだった。現地の人たちが土着のリズムを活かして奏でるミスは、質素なチャペル全体が一つの心臓のように脈打ち、自分の心もそのリズムに引き込まれて震えた。まさに「セレブレーション」。いつからか、自分の心に刻まれた「わたしもあなたがたのうちにいる」(ヨハネの福音14:20)という言葉を実際に体感した気持ちになった。

この経験がずっと心に残り、自分が会長職を拝命した時、活動のテーマを「土臭いキリスト」と設定した。神たる存在であるキリストが、わざわざ我々と同じ人間の身体を纏い過ごした。我々と同じように腹を空かせ、汗をかき、排便もし、一喜一憂し、酒も交わした。「あなたがたのうちにいる」身近な存在であるキリストに寄り添おうという思いだった。

そのような視点から皆で改めてミサの在り方について研究したり、フランシスコ・ザビエルの書簡を研究し、日本人である我々にとっての「土臭いキリスト」はどのような存在であるのか議論し、考察した。そして、相変わらず串友での激しい呑み、新歓合

宿での「けつつあん」、トイレ直行の「電気ブランいっき」……温かくも不条理なノリを脈々と続けた。

振り返ると、このような活動を通じて、自分の中に次第に形作られていったのは、「あなたがたのうちにいる」という言葉が自分に語り掛ける、「我々は神たる営みの一部なのだ」という想いだった。時を経て、自分の思想的な基盤は様々に変化してきたものの、この想いは確信に近いものに成熟している。

「かの日には、わたしが父のうちにおり、あなたがたがわたしのうちにおり、わたしもあなたがたのうちにいることが、あなたがたに分かる。」(ヨハネ 14・20)——この聖句が示す、共に在る神の姿こそ、日本人である我々にとっての「土臭いキリスト」なのではないかと感じている。

先輩、同期、後輩、神父様との交流を通して、様々なことに気付かせてくれたカト学の会室は、自分にとって上智のどの教室よりも「教室」らしかったかもしれない。しかも、いつ行っても時さんが持ってきてくださる、ポンジュースの瓶に入ったポンジュースならぬ紅茶が飲み放題だった。今もって深謝です。

追伸*カト学の温かくも不条理なノリの決定的証拠であるアルバムの数々はどうなったのだろうか、と時々思います。各学年カnpパして、Google Photoなどにスキャンしてアップロードできると嬉しいな。

カト学は瞳の中に

イエズス会司祭 越智 直樹

1999年度神学部神学科入学

確かに入学式の二日後の復活徹夜祭で洗礼を受けることにはなっただけですが、個人情報云々が言われたす前とはいえ、入学前に突然「カトリック学生の会」なるところから「カト学へようこそ。新入生歓迎会に来てね」というハガキが届いた時には驚きました。「どんなサークルがあるのかな」と胸を躍らせてキャンパスを見渡す間もなく、私はもうカト学の一員だったのです。けれど、洗礼を受けること自体が、生まれる前から導かれていたように感じていた私にとっては、カト学に入ることどこか自然な流れのように思っていました。

それまで日曜学校や中高生会のような教会の集まりを経験したことがなかった私にとって、カト学という場はとても新しい居場所でした。単に遊ぶだけでなく、一緒に祈ったりミサに出たり、聖歌やカト学ソングを歌ったり、分かち合いをしたり、合宿をしたり、行事の準備をしたり、ボランティアをしたり、巡礼をしたりということは、全てが新しい体験の連続でした。カト学の、あのちよつと甘〜い感じが苦手だと、仲間たちに堂々と公言していた時期もあります。でも、そんな私に「とか何とか言っただけ、やっぱりナオキはカト学、大好きだよ」と微笑みながら言ってくれる仲間たちがいて、その言葉に私は甘え、そしてゆるされてきたのだと思います。「私たちがカト学に集まっているのは、偶然じゃない。必然なのだ」と当時の指導司祭が言い切ってくれた言葉には、本当に胸が熱くなりました。

ソフィア祭、ザビエル・ウィーク、クリスマスなど、いくつもの大きな行事の準備のたびに、私たちは「カト学は仕事じゃない、イベント屋でもない」と氣勢を上げ、「じゃあカト学って何なんだ？」という問いをめぐって、真剣に語り合ったように思います。疲れ果てて沈黙が場を支配するような時もありました。そんなときは大体、会ったこともない先輩たちの笑顔の沢山つまったアルバムが何十年分もびっしり並べられた本棚を背にした黒いソファで、誰かがギターをつま弾き始める。すると、いつの間にかみんなカト学ソングを歌っている、そんな場所でした。結局答えを見つけれなかった「カト学っていったい何なんだろう」という問いをそのまま残しておいていい居場所だったように思います。

最初に卒業してから一〇年ほどが経ち、まさかの二度目のカト学メンバーになった時にも同じことを実感しました。会室の場所もメンバーも変わっていたし、私もイエズス会の神学生になっていましたが、カト学はカト学のままで、やっぱりカト学とはいいたい何だろうかと真剣に話し合ったり、一緒に歌ったり、心を合わせて祈っていました。かつての後輩は大先輩になっていたし、「中高の先生に勧められてカト学に入った」という新しい仲間その「先生」というのがかつての同級生だったりして驚きましたが、カト学の新しい仲間たちは変わらない優しさで私を迎えてくれたのでした。壁に並んだアルバムの中に並んだかつての仲間たちの笑顔は「やっぱりナオキはカト学、大好きだよね」——そんなふうに、微笑みかけてくれているようでした。

私にとってカト学はまだ過去のものにはなっていません。今でもクリスマスのイルミネーションを見るたびに、「カップルたちのために、上智でもイルミネーションをやるよ」と頑張っていた彼のさわやかな笑顔を思い出します。一年生の時の会長さんが作ったカト学ソングを思わぬところで耳にするたびに一緒に歌った「なかま」の姿がよみがえります。そんな私は今はイエズス会士としてイエズス会が母体となっているいくつかの中学・高等学校へと繰り返し派遣されていますが、どの学校にも、先生として頑張っている世代を超えたカト学の仲間たちがいて、毎日一緒に働いているのです。

そういえば、現役だった時に40周年というイベントがあったような気がします。あのとき、初めてお会いした年の離れた先輩方の姿を見ながら「やっぱりこの感じ、カト学っぽいな」と思っていました。あれから四半世紀が経ったということになりますが、これからもカト学にはカト学っぽさを失わずにいて欲しいと思うのです。そして今日も、会室で「カト学とは何か」と真剣に話し合っていて欲しいのです。なぜなら私にとっての「カト学」とは、学生時代という青春のひと時を共にし、答えの出ないような問いを本気で語り合った仲間たちの真剣な眼差しの先に、あのいつまでも色あせない笑顔の中に、涙で真っ赤になった目の潤みの内にあるからです。私の居場所は、仲間たちのその瞳の中になりました。そこが、私がいたところ——私にとっての「カト学」だったのです。

カト学65周年おめでとうございます。

神様の慈しみの眼差しのもとで、これからもカト学がカト学であり続けることができますように。

私を支えてくれたカト学

池田 辰之助

2014年度神学部神学科入学

私が初めてカト学という言葉を目にしたのは、恐らく小学校の頃だったと思います。当時、私が所属していたカトリック本所教会には、カト学の大学生やその友人の方々が、ジョイスという名前の青年会を運営し、子供たちの面倒を見てくださっていたからです。もちろん、その時は大学やサークルといった言葉の意味もあやふやで、ともかくいつも面倒を見てくれるお兄さん、お姉さんたちの集まりなのだと認識していたように思います。その時の思い出を振り返ると、その時のお兄さん、お姉さんたちはいつも楽しそうに仲良くイキイキとしていて、子供心にカト学というところは楽しいところなのだと感じておりました。

再びカト学という言葉に出会ったのは高校生の時でした。いよいよ進路を決めようと悩んでいた時、まず頭に浮かんだ志望校が上智大学であったのは幼い頃に見ていたカト学の大学生たちの姿にやはり惹かれるものがあつたのでしょう。もうすでに卒業されておられました。が当時の大学生の方にもお話を伺い、それだけで九割くらい上智大学を目指そうと心に決めておりましたが、最後に私の背中を押してくださったのが、その時、時たま本所教会にミサをあげてくださったトマス・エッセイサバレナ神父様でした。エッセイサバレナ神父様は、私に「ぜひ頑張るなさい、よく勉強しなさい、できればカト学に入って色々な人と関わりなさい」と仰ってくださいました。

それらの暖かいご支援を受けて、私は2014年に上智大学神学部へ合格し、早速、フレッシュマンウィークからカト学にも所属できることになりました。カト学の先輩方は暖かく迎えてくださり、授業のことや学内の施設のこと、学内のミサのご奉仕のこと、ギターの弾き方など、私が会室に行くたびに色々なことを教えてくださいました。また、私にとつて忘れることができないのは、SJハウスの神父様方の存在です。夏の合宿やカト学での活動を見守ってくださいました指導司祭の具神父様やフィルマンシャー神父様の祈りの力強さや優しさは、活動やそれ以外の様々な悩みに翻弄される私を支えてくださいました。さらに、神父様方は、時折、会室の扉をノックして私たちとお話をしてください、それもカト学生生活での楽しみの一つでした。特に、授業期間の11時と15時には、よくユエルグ・マウツ神父様が会室を訪ねて来てくださいました。会室の扉を力強くノックし、「コーヒーは？」と尋ねる神父様の姿は、きっと他の世代の方々もよく覚えていらっしゃるのではないのでしょうか？私は本当にマウツ神父様が大好きで、神父様は、時折、私たち学生をカフェに誘ってください、コーヒーを飲みながらドイツの歴史やご自分の若い頃の思い出などを教えてくださいましたし、悩んでいた時はあの笑顔で励ましてくださいました。カト学に入れたことで神父様と近い距離で関わるこ

とができ、そのありがたさをいつも感じておりました。

こうしたことから、私が授業がない時は自ずとS Jハウス内の会室へと足を運ぶようになっていくのにそう時間はかかりませんでした。そして、先輩方や指導司祭の神父様方のお姿に倣い、私も後輩たちをできる限り会室に誘ったり、バザーやザビエルウィークのことを積極的にお伝えしていけるよう心がけました。そうしたこともあり、二年生に進級した2015年にはザビエルウィーク委員長という大任を任せていただき、先輩方や同級生、後輩の助けをたくさんあってなんとか無事に終えることができました。その時の達成感や感動は忘れることはできません。同じ志を持つ仲間と協力して、学内外で、神への奉仕を行なっていく喜びは、何者にも変え難いものでしたし、そこでようやく幼い頃であった大学生の方々のお姿の真髓を垣間見ることができたような気がしました。

卒業し、自分がOBになってからも、カト学での繋がりでも仲良くしていただいている先輩や後輩は多いです、カトリック学校で教員として勤務する今、研修や集まりでお会いする他校の先生方にはカト学のOB、OGですという方も多く、そうした方々と出会うと一気に距離が縮まり、カト学の絆の深さを世代を超えて感じています。今思い出すと、私の人生はいつも「カトリック学生の会」に関わっており、そして、その思い出は、いつも周りの人たちに支えられて来た大事なものであったことを改めて感じています。当時から今に至るまで、お世話になってきた神父様、先輩、後輩の皆様には本当に感謝の気持ちで一杯です。また今回、こうした執筆の機会をくださった先輩方にも感謝申し上げます。本当にありがとうございました。そして、何よりこうした出会いに私を導いてくださったことを神に感謝したいと思います。

これからもこうした「カトリック学生の会」を通じた素敵な繋がりが続いていきますように微力ながらお祈りさせて頂きたいと思えます。カト学に関わる全ての皆様の上に神様の祝福が豊かにありますように。

青春の場所

渡邊 知世 2018年度神学部神学科入学

先輩方のたくさんのおい出と忘れ物が残ったS Jハウスの会室は、間違いなくわたしの青春です。

カトリックのことをほとんど何も知らない私が「カト学」と出会ったのは、たまたま友人の先輩が所属されていたからでした。初めてわかちあいをしたり、ミサで朗読をしたり、すべての活動が新鮮で学び深いものでした。地方の公立高校出身で教会での奉仕の経験もなかったわたしに、イチから教えてくださった先輩方や同級生には本当に感謝しています。学園の大きなミサで先唱をさせていただいたことも私の自信につながっています。本当にたくさんのおい経験をさせていただきました。

そんな中、コロナウイルスの流行によって、わたしたちは直接集まって話をするのができなくなりました。会員同士で連絡を取り合うことはできましたが、以前のように昼ミサの後に一緒にご飯に行くことも、会室で談話することもできなくなっていました。みんなで集まることができないう寂しさや、例年開催している行事ができなくなってしまうことへの焦り等、当時はマイナスの感情が働いてしまうことも多くありました。しかし、会長と相談し、オンラインでのわかちあいやザビエル祭の実施ができました。あの時はどうなるかと思っただけで、今となっては、頑張つてよかったね！そしてインターネットの発達に感謝だね！と前向きに捉えることができます。通学が再開されるようになり、会員みなでご飯会をできた時は、今までになく嬉しかったことを覚えています。たくさん制限の中で、カト学としてできることを探した2020年だったと思います。

また、わたしたちの代は会則の更新も議題が上がっていました。会員数の減少により、会則にある数字ではなにもアクションを起こせない点や、会長職が信者である必要性はあるのかという点、この二点が大きな争点だったことを覚えています。この時も先輩方、そしてカト学の歴史をよくご存じの神父様方のお力を借りて、新しいカト学としての歩みを始めようと何度もオンラインミーティングを重ねました。最終的に、意見がまとまる前にわたしたちが卒業してしまつたので、その後どうなつたかはわかりません。最後までできなくてごめんねと先輩の皆さまにお伝えしたいです。

現在は、ご縁があつてカトリックに関係のある仕事に就くことができます。人の温かさや聖書の言葉からの神様のメッセージ、たくさんのお恵みを感じている毎日です。生きていくと大変なこともたくさんありますが、それでも乗り越える知恵や勇気を神様がくださっていることを忘れずに、そして、わたしが他者に対してできることを考えながらこれからの人生も歩んでいきたいです。

カト学の不思議な招き

佐野 昂輝 2020年度文学部史学科入学

カトリック学生の会は不思議なところで、いろいろな人がいます。当然、家族皆がカトリック信者で自分も幼児洗礼を受けた信者という方や、中学や高校がカトリックの学校だったという方が大勢いる一方、今までキリスト教やカトリックと全く関わりがなかった人もおります。皆それぞれの理由をもってカト学に招かれているようです。

私も後者のうちの一人で、高校卒業までキリスト教とは世界史以外ではかかわりのない生活を送ってきました。受験の際に上智大学がカトリックの大学ということだけは知っていましたが、敷地内に修道院があったり、何人も神父様の教員がいたり、カトリックを掲げる学生団体があるということは全く知らないまま、入学しました。しかし不幸にも入学年度の2020年度はコロナ直撃で、入学式もなければ授業もすべてオンライン、当然対面のサークル勧誘やキャンパス内外での活動もなく、当初はずっと家にもって生活していました。

私がカト学を知り、そして加入したのは一年末から二年中盤にかけてです。自宅待機の状況は仕方ないにしても、せっかくの大學生活なのだからサークルにも加入してみたいと思い調べていたところ、目に入ったのが『カトリック学生の会』でした。もともと歴史や文化が好きであり、また、せっかく上智大学に入ったからにはカトリックについて勉強してみたいと思い、加入を考えました。一方で、それまで何のかかわりもなかったため、入ったところについていけるかという不安もあり、また実際の活動内容を見る機会がなかったこともあり、しばらく悩み、入会は二年のころでした。

二年時の活動は専らミサの奉仕でした。対面授業再開に伴い、学内の昼ミサが行われるようになり、カト学も毎週水曜、金曜に先唱、第一朗読、侍者などの奉仕をすることとなりました。私ももちろん参加しましたが、それまでミサに出たことなどありませんでしたので、典礼も何もわかりません。先輩方やカトリック学生センターの皆さんにサポートをしていただきましたが、それでも慣れていないことは慣れていない。そこで、水、金の奉仕に限らず都合がつく日は昼ミサに参加し、ミサの流れを必死につかみました。このある種の特訓により、クリスマスミサの頃には、何とか皆さんについていけるようになりました。その時期に、同時に私の会長就任の話も上がり、三年の時には一年間会長の職を務めさせていただきました。会長任期中はいろいろなミサで奉仕をさせていただいたり、S Jハウスのブラザー方と交流会を開いたりといろいろな活動をさせていただきました。会員数が増え、活

動も賑やかになってきたころには会長職を後輩と交代し、それ以降は気楽に活動に参加していました。

最終学年の四年となり上がるようになったのは洗礼の話です。約二年間カト学で活動し、会長職にはちゃんとした勉強も必要だと思いカトリック学生センターの開く入門講座も受けてはいたものの、私はその時も洗礼を受けていないまま。聖書講座の先生も、カト学の皆も、しきりに受洗を勧めてきました。初めのうちはまだ勉強不足だとか、簡単に決めていいものかと思っていたものの、神父様や信者がこんなに多い環境はおそらくもう今後ないだろうと考え、2023年12月24日に洗礼を授かり、ヨセフという名前もいただきました。その日は夕方からクリスマスイブのミサがあったため多くの神父様が学内にいらつしやり、四名もの神父様が共同で司式をしてくださる大洗礼式となりました。カト学会員も午前中の洗礼式、午後のミサと忙しい中、茶話会まで開いていただき、お祝いの言葉をたくさんいただきました。

他にも、長崎へ巡礼に行ったり、大学の企画で行くローマ巡礼に大勢のカト学メンバーが参加して皆でバチカンやアッシジを巡りたり、イエズス会の叙階式に参列したりと、いろいろなことをしました。また、私が卒業してからも、後輩たちの手によって活動の幅はどんどん広がっております。今では東京都内のカトリック系大学と共同で企画を行っているとのこと、私も一般参加者としてミサに参列させていただきました。プライベートでも当時の友達や先輩後輩とは卒業後も付き合いがあり、時々遊びに行ったりしています。

今回、カト学65周年の記念誌に寄稿させていただくにあたり、自分とカト学の付き合いを回想いたしました。実に不思議なものでした。入学当時は何者でもなかった私が、カト学に飛び込み、会長を務め、最終学年では洗礼を受けるまでになったのです。夢に主の天使が現れたりはしませんでした。私はやはり、招かれていたのではないかと思います。そしてキリストの弟子になり、多くの兄弟姉妹を得たのです。

今後もカト学は続いていくでしょう。そしてこれからも、さらにいろいろな人がカト学、ひいてはイエス様に招かれ、学生時代を分かち合う兄弟姉妹を得るのだと思います。

「カト学」で得た恵み

橘 優有 2023年度神学部神学科入學

初めまして。2025年度カトリック学生の会の会長を務めさせていただいております。橘優有と申します。私はカトリックの信者ではありませんが、神学部にて学んだことをミサや聖書の分かち合いといった実践によってより具体的に学ぶことができています。また、カト学は会員や先生方との交流の機会となっており、毎週水曜日に「カリス」という会を開いています。ロザリオ作りや教会訪問等の活動も行い、作ったロザリオはバザー品と共にソフィア祭にて販売し、その売上を全額団体に寄付するといった活動も行っています。今年のソフィア祭はバザー品を含め、本格的にロザリオを販売する予定ですので、ぜひ上智に遊びにお越しただけたら幸いです。

ここで、春合宿の体験を共有させていただけたらと思います。私たちは今年の3月に、栃木県那須市のベタニア修道女会聖ヨゼフ山の家にて、二泊三日で合宿を行いました。毎日ミサを行い、また聖体礼拝も行いました。シスターが作ってくださった美味しいご飯を食べ、ボードゲームをする等の楽しい交流の機会ともなりました。印象に残ったことはトラピスト修道院を訪問したことです。トラピスト修道院は観想修道会ということもあり、どのような方が所属しているのか気になっていたので、貴重な機会を頂けて大変嬉しかったです。神父さま、シスターの方々はとても明るい方で、温かく私たちを迎えてくださりました。毎朝の三時に起床するようで、次の日には早朝に行われるミサに、カト学の会員もあずからせていただきました。那須の自然を感じながら、祈りを通してよりカト学という共同体のつながりが支えられた春合宿となりました。

以上のように、神学部で学んだことを生かす機会となっているカト学は、新鮮さも感じております。そして信者の方が多数在籍しているカトリック学生の会のおかげで、対話を通してキリスト教をより知ることができました。信者ではない私が、キリスト教に関わることによってもたらすことができる恩恵を模索しつつ、末永く、そしてより活発なカトリック学生の会となれるよう、活動していきたいです。

生きた神学を体験できるコミュニティ

郡山 隼 2024年度神学部神学科入学

私がカトリック学生の会に参加したのは、クリスチャンとしての背景を持っていなかった私のような生徒であつてもカトリックの方々がどのようなことをなさっているのかを知り、体験することができると魅力を感じていたからです。私にとって上智大学のカトリック学生の会が提供してくれる機会と経験は非常に貴重なもので、他大学ではなかなか得られない知識と学びを与えてくれるものでした。神学や聖書に対して興味がある、もしくは信仰生活を実際に体験しながら黙想会に参加したり、教会で祈ったり、聖餐での奉仕に勤しむことで学生生活にリズムと瞑想の時間を得たい、そう考えている人々にはぜひこのカトリック学生の会を勧めたいと感じています。

カトリック学生の会は受洗したクリスチャンである方にも、未受洗でもキリスト教に共鳴している方にも、そうでない人々にも広く普遍的に門戸が開かれています。各々の個性が活かされる機会も多く、イベントを開催する側として活発に活動しているところも特徴です。OB・OGの方々との交流、司祭・シスターの方々のお話を聞けることもあります。私は色々な人々とともに造り上げられ、人と人があらゆる領域を超えて繋がっていることをカトリック学生の会で実感しました。

私も既にカトリック学生の会に加わってからはや二年が経ちましたが、思えば初めの頃よりも様々なことを考えるようになりました。会員同士のつながり、他者への奉仕の活動、この二つを通して私たちはいろいろな学びを得ています。不思議にも、私が今最も感じているのは「私には何ができるだろうか」という自己定義への問いかけです。カトリックの学校の生徒であつた経験もなく、カトリックの信仰生活への知識が乏しかった私はどうしてもこのサークルで居場所を見出せずにいました。ここで自分ができることはないのかもしれないと思い、退会しようと考えたこともありましたが、私自身はなんとかがみついています。私のような人間でも、このカトリック学生の会というコミュニティでしか出会えないことがたくさんあるのです。教会の訪問、課外活動、ボランティア、黙想、ロザリオ作り、こうしたことは私一人では絶対に成しえなかつたと思つています。カトリックの人々がどのような信仰を持ち、実践しているのか。どういったコミュニティとネットワークがあるのか。そこに一番関心があつた私にとってこれ以上に興味深いサークルはありません。

このカトリック学生の会というサークルは、カトリックである学生たちのためだけの会、というだけでなく、カトリックを通して多様な学部学科の学生たちの集いを実現させると思つています。このサークルがあらゆる人々との交わりの中で作られているということをお忘れずに、これからもカトリック学生の会の一員として、信仰・典礼・奉仕、そして時に大いに楽しんで喜びを分かち合うということを大切にしたい所存です。改めまして、カト学65周年、おめでとうございます。

求める者の軌跡

篠田 佑人 2025年度文学部哲学科入学

キリスト者には二種類いる。生まれながらに教会の輪の中に在る者と、そうでない者だ。かく言う私は後者である。幼稚園から高校までミッションスクールに通ったことは一度もないし、かつて聖書を読んだことも、教会に行ったこともほとんどなかった。漠然と自分の生きる意義や在り方を問う、味気なく光るものがない非キリスト者であった。

そんな私に転機が訪れたのは高三の受験期である。元々語学や思索が好きだった私は、長い伝統と実績を誇る上智大学哲学科への進学を目指して一般受験と併せて公募推薦型の試験対策に必死になって取り組んでいた。その一環として哲学関係の新書を読み漁る中で偶然出会ったのが、トマス・アクイナスの神学論である。かねてより私は絶対者の存在措置に肯定的であったのだが、彼の神学的論証、とりわけ自由意志と恩寵の協働関係、そして信仰による理性の拡大に関する論証は、おぼろげだった私の絶対者像にキリスト教的三位一体の神として、また生の絶対的な肯定者としての明確な形を与える驚くべきものであった。

かくしてトマスをきっかけにキリスト教の精神文化に惹かれ始めた私は、宗教哲学をメインテーマとして公募制入試に挑戦することを決め、最終的には有難くも入学を許可して頂いた。だが当時抱いていた思いは単に合格した喜びだけではなく、神学部ではないどころかクリスチャンとしてのルーツさえ持たない私が教会の輪に入るためには、何かしら行動を起こさなければならぬという焦燥に似た気持ちであった。そんな時、大学の宗教活動に関する情報を検索する中で出会ったサークルこそ、上智大学カトリック学生の会だった。座学だけではなくカトリックの作法を体験的に学べる環境を求めている私はこの団体に強い興味を持ち、ウェブ上の情報や新歓への参加を経て迷うことなくカト学に加入する決意を固めたのである。

現在、大学入学及びカト学入会から約三か月弱が経った。最初の頃は聖書の言葉やミサの手立てなどろくに分からず右往左往していたが、哲学科教授でおられる長町先生の聖書研究会や教会での聖書講座、カト学のカリスやミサに参加させて頂くにつれ、カトリック文化への理解が深まりつつあることを実感し喜ばしく思っている。さらに最近は準備片付けや朗読といった役で昼ミサの運営にも少しだけ参加させて頂いており、実践的な関わりを通じて日々新たな知見を得られている。この三か月を振り返るに、文学部一年生で新参者にも程がある私に多くをご教授下さり、いつもこちらが申し訳なくなるほど親切にして下さるカト学の先輩方

や指導司祭のますけん先生（敬愛の意を込めて）、カトリック・イエズス会センターの方々には改めて感謝の念が尽きない。

生来教会の輪からは外れていた私であったが、奇しくも誕生日は上智大学の創立記念日かつ諸聖人の祭日と同日であり、また祖父母と両親が結婚式を挙げた場所が聖イグナチオ教会であることを思うと、何かと不思議な縁があるように感じる。この場所に導かれて素晴らしい人々と出会えたことへの感謝を胸に刻みつつ、これからもカト学での活動を通して多くを学び、地の塩、世の光として在るキリスト者を目指してゆきたい。

中学・高校時代に教会から足が遠のいていた私は、上智大学カトリック学生の会から届いた新入生歓迎パーティーと春合宿の案内を無視していたのですが、「折角ご案内をいただいたのだから、パーティーだけでも出かけたら」と母に言われてパーティーには行きました。それだけで終わるはずだったカト学との関係は、そのパーティーで知り合った同じ法学部の一年生菅原裕二君に会室（いちいちきゅう）に連れて行かれたために断ち切れなくなりました。カト学で巡り合った先輩たち、同期、後輩たちのお蔭で、大学四年間はほぼカト学一色になりましたが、私の人生の中で最も頻繁に且つ数多くミサに与かり、仲間たちとともに祈ることができ、ゆるいものからかたいものまで多岐にわたるお題について時間を気にせず（多くの場合お酒を飲みながら）熱く語り合うことができました。神様に感謝です。

そのカト学は私が四年生の年に20周年を迎えました。記念パーティーで初めてお会いした先輩たちから、学園紛争の頃、その前、そして、創設まもない頃のカト学のお話を聞いて、自分たちの活動や議論の幼稚さを恥ずかしく感じたことと、自分たちが引継ぎ変わらずに続けている行事や活動もあると分かり妙に安心したことを憶えています。

あれから四五年が経ちました。この間、正直に言えば、カト学のことを忘れていた時もあったと思います。40周年の記念ミサと祝賀パーティーには参加したのですが、その時のことは殆ど何も憶えていません。会社人として一番忙しくしていた頃だったということなのでしょう。50周年の時は仕事で参加できませんでした。

さて、今回の65周年については、ちょっとした経緯があります。私は、私をカト学に引きずり込んでくれた親友菅原裕二神父の叙階30周年（2021年）を盛大に祝いたいと前々から考えていたのですが、コロナウイルス感染症の蔓延により二度の延期を余儀なくされ、漸く2023年1月21日に行うことができました。そして、その会の参加者たち（還暦を過ぎた仲間たち）から、次はカト学のOB・OG会のような集まりを「オールソフィアンの集い」の日に開こうという話を持ち上がり、準備期間は短かったのですが、2023年5月28日にそれが実現しました。この集まりで、それぞれの時代のカト学の活動には色々違いはあるものの、私と同じように、カト学（の仲間たち）にエネルギーをもらって学生生活を楽しく終えて社会に出て、今また、そのカト学の不思議な力を改めて感じたい、カト学の仲間たちとの絆を確かめたいと思っているOB・OGが大勢いらっしやったことがわかりました。そこで、65周年というのはやや中途半端な感じは否めないのですが、その集まりに参加してくれたカト学の現役学生メンバーにもお手伝いいただいて、65周年の記念ミサとパーティーが実現したというわけです。

次にお会いするのは、70周年でしょうか、75周年でしょうか。その時まで、カト学で分かち合ったものを糧にそれぞれの道をしつかり歩み続けたく思います。

上智大学カトリック学生の会創立65周年記念誌

発行日 2026年3月25日

発行 上智大学カトリック学生の会

東京都千代田区紀尾井町7-1

印刷 有限会社シュープリント